

Title	図書館目録カードが消えた日
Author(s)	柴田, 史子
Citation	ぱびるす : 聖学院大学図書館報 / 聖学院大学総合図書館, 第 60 号, 2015
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5370
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

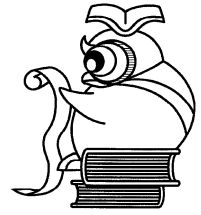
SEigakuin Repository and academic archiVE

ぱびるす

聖学院大学総合図書館報

第60号 (2015年春)

祝卒業・
新生歓迎号



図書目録カードが 消えた日

柴田 史子



近年では、パソコンが並んでいるのが図書館の入り口付近の見慣れた風景であるが、一昔前までは入り口付近には図書目録カードのカードケースがずらりと並んでいた。あの引き出しの行列を見かけなくなったのはいつの頃からだろうか？

私は1981年から2年間、ハーバード大学で短い留学生活を送った。大学構内には大小90余りの図書館があり、研究テーマのアメリカの宗教に関しては、どんなに古い文献でも手に入らないものはないという、恵まれた環境であった。アジアの文献を所蔵する燕京^{イェンチン}図書館には、時折、日本の新聞や雑誌を読みに行ったりしていたが、留学2年目には、そのジャパン・セクションでアルバイトもさせてもらった。

仕事内容は、目録カードの書籍を館内からオフィスに運んでくること、カードの記載の誤りを訂正すること、書籍や古い目録カードを元の場所に戻すこと、などであった。日本語ですべての情報が記載されている新しい目録カードの所定の場所に、著者名と書名を英文タイプライターで打ち込む仕事は、ミスが許されない作業で、すぐに私には回ってこなくなった。オフィスにはまだ1台もワープロはなかった。「カードの写真を撮って冊子目録にするそうよ。それで、目録カードは廃止になるんですって。」というのが、ボスの説明だった。情報をコンピュータに入れるという話だったが、「コンピュータ=電子計算機」という認識しかなかった私たちアルバイト学生は、「計算機に図書の情報を入れてどうするの?」、「カードがなくなったらどうやって検索するの?」と、釈然としない思いをかかえて作業をしていた。

1993年2月、「里帰り」の機会を得て燕京^{イェンチン}図書館を訪ねた。「貴女がいたころにしていた仕事、これになったのよ」とA3版ほどの大きさの分厚い本が並んだ棚を見せられた。図書館からは、目録カードの引き出しは撤去されていた。

アメリカの図書館がカード目録を採用し始めたのは1850年代であるが、約100年の時を経て機械可読目録の導入が始まった。コンピュータ端末による目録検索が普及していったのは1980年代後半だという。つまり、私はそれとは知らないまま、図書館のこの大きな動きの一端を担っていたということになる。クリック1つで本の検索ができるようになるまでに、どれほど多くのアナログな作業があったことか……何年間も顧みられることのなかった黴臭い本を探して暗い書庫を行き来した日のことを感慨深く思い出す。そして、同時に、この手軽さ・便利さの向こう側に、著者たちの魂の、アナログなものがきがあることが忘れられることのないようにと願うのである。

(総合図書館長 人文学部欧米文化学科教授)